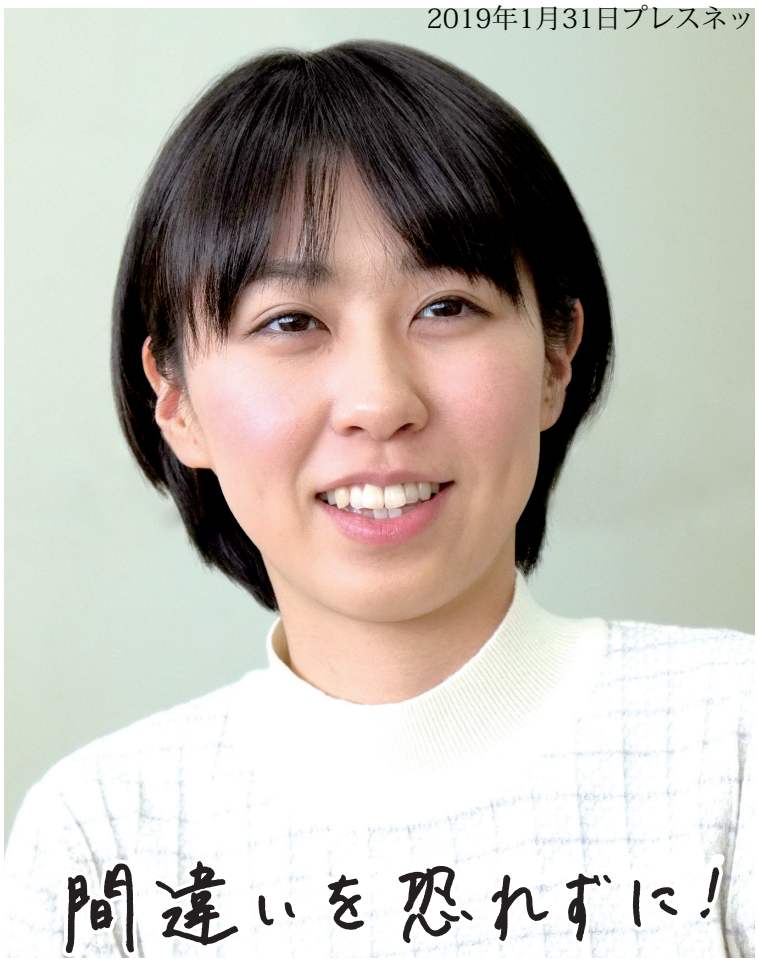
2019年1月31日プレスネット掲載



学生に英語を教える高橋さん（英語の授業風景の一コマ、写真上）、コーパスの検索結果をパソコン画面で確認する高橋さん（写真下）

関係詞に着目したコーパス分析による習熟度別特徴付けがテーマ

大量のデータを基に英語学習者の傾向分析 教材開発に役立てたい

広島大外国語教育研究センター助教

高橋 有加
TAKAHASHI YUKA

宮城県出身。2008年に仙台白百合学園高卒業後、豪州の大学で3年間、言語学を学ぶ。その後東京外国語大に編入。16年、東京外国語大大学院総合国際学研究科博士前期課程修了。日本学術振興会特別研究員を経て、18年4月から現職。

■専門はコーパス言語学

コーパスとは、実際に使用された大量の言語資料をコンピューター上にデータベース化したもの。そのコーパスを利用して、言語の傾向や仕組みなどを分析するのがコーパス言語学です。コーパスには、さまざまな種類があり、私が今研究で使っているのは日本人英語学習者の書き言葉コーパスや話し言葉コーパスです。

■関係詞に着目

近年、日本の英語教育に影響を与えている国際的な外国語習熟度の基準にヨーロッパ言語共通参照枠（ＣＥＦＲ）があります。ＣＥＦＲには６つのレベルがあり、日本人に特化したコーパスを使い、それぞれの習熟度の学習者にどのような言語使用の特徴があるのか明らかにしたいと思っています。そのレベル分けの際に有効な基準になると判断したのがwhichやthatなどの関係詞です。

説明を加えたり、限定したりする関係詞は、日本人が習得するのに時間がかかる文法項目の一つとされており、関係詞が英語力を見る目安になると考えました。

■研究から見えたこと

関係詞の使用頻度は、ＣＥＦＲレベルが上がるにつれて多くなっていることが分かりました。また、関係詞の知識があっても間違いを恐れたり、使用が不必要であると判断したりした場合には使用されない関係詞が多くあることも分析できました。

エラーに着目すると、習熟度レベルが中級程度になるにつれて、関係詞のエラーの頻度も高くなることが分かりました。ただ、エラーが多いことは関係詞を使っている証拠でもあり、ある程度のレベルに到達している目安として見なければならないことを示唆しています。

■原点は「ハリー・ポッター」

小学生のときに、「ハリー・ポッター」の映画を見て、登場人物の流ちょうな英語に感動。「いつかあんな英語で世界中の人と自由に話してみたい」と思ったのが、英語を勉強するモチベーションになりました。私の経験だと、英語を使って何かを知りたい、という具体的なイメージをつくることが、英語が好きになる近道かもしれませんね。

■夢

関係詞以外の文法項目も分析してみたいと思っています。こうした研究を通じて分かったことを教材開発やシラバス（授業計画）の構築に役立てたり、具体的な学習到達目標のための目安として応用したりすることで、効率的な英語学習につながれば、と思っています。

（聞き手　日川）